古典研究会　研究発表　連載

是為論～是を論と為す～⑪

『十三総勢説略』（その１）

「老三本」（『太極』第249･250号参照）の中から、今月号より『十三総勢説略』（『十三勢説略』ともいう）を取り上げます。楊名時太極拳の稽古要諦のうち「主宰於腰」という熟語は、この文献が出典元です。

『十三総勢説略』は武禹襄が残した文献と考えられており、太極拳のルーツと言われる拳法「十三勢」の動作要領を簡潔明瞭に論じたものです。今回は、まず武禹襄の人物像を紹介し、関連する文献『打手要言』について触れてみます。

＜李亦畬の師で、武式太極拳の始祖武禹襄＞

武式太極拳の始祖である武禹襄（1812～1880年河北省永年県生まれ、名は河清、字は禹襄）は、有能な官僚を輩出する名家の出身で、彼自身も頭脳明晰だったようです。しかし彼は役人の道には進まず、拳術の研究に没頭し、その結果、現代の太極拳理論の礎を築いた先駆的人物の１人となりました。

武禹襄の生涯の中で、大きな３つの巡り合わせがありました。まず、同郷の楊露禅が陳家溝で学んだ拳術（陳氏老架式）の高い技巧を目の当たりにし、それを学んだこと、そして長兄の武澄清を通じ『太極拳譜』を入手し、太極や陰陽思想など哲学を基礎とした武術論に触れたこと、その後、趙堡鎮の陳青萍から武術（陳氏新架式を学んだと言われる）を学ぶ機会を得たことです。これらの体験を経て、拳術の実践と理論を融合させたのです。

彼は多くの弟子を取らず、拳術の技と理論をわずかな弟子にしか伝承しませんでしたが、武禹襄とその親族は、楊式門派の楊露禅、その息子の楊班侯、楊健侯と親交があったため、その理論は楊家にも伝わりました。現在に至るまで、動きの要点などを分かりやすく記した武禹襄の理論書は、太極拳の各流派や研究者など、多くの人々に長きに渡って読み継がれてきました。

武禹襄1812～1880

＜枝分かれしながら受け継がれた理論＞

武禹襄作とされる文献に『十三総勢説略』のほか『十三勢架』、『太極拳解』、『四字密訣』、『打手撒放』などがあり、いずれも弟子の李亦畬が、師のメモや口伝を整理して残しました。「郝和本」に収蔵されている『打手要言』も同様です（『太極』第250号参照）。

『打手要言』は、拳術の動きの要訣について論じたもので、全体が５つの段落から成る長文です。各段落は「解曰（解いて曰く）」、「又曰（また曰く）」から論述がスタートしています。武禹襄が『太極拳譜』を研究した成果や、修行で得た拳術の技法と要訣について、バラバラだった彼の記録を李亦畬が順序立てて構成したと考えられます。

『打手要言』は、一部の段落が独立した形でも読み継がれ、複数のバージョンに枝分かれしています（下表参照）。子孫や他の太極拳家により、文言が加筆、改編されたケースもあります。

『十三総勢説略』は、武禹襄の論述を弟子で甥の李亦畬が、『打手要言』の第５段落目に組み入れましたが、独立した１つの文献でもあります。その重要性から「武禹襄太極拳論」と称され、太極拳の拳理研修に必読のものとなっています。

※『十三総勢説略』の原文と訳文は次回号で掲載予定です。

『打手要言』の各段落から成る文献の事例

『打手要言』	『十三勢行功心解』	『十三勢行功要解』	『太極拳解』	『太極拳論要解』	『十三総勢説略』
「郝和本」収蔵の文献。５段落から成り、1、2段落は「解曰～」、3、4、5段落は「又曰～」から文が始まる。	『打手要言』の第１段落目、第２段落目、第３段落目から成る文。ただし文字や言葉使いは刊本により異なる。内容は、主に気の運行や呼吸、姿勢などに言及している。	『打手要言』の第１段落目から成る文。意、気について、また姿勢の要求についても言及している。	『打手要言』の第２段落目から成る文。武禹襄の『太極拳論』と紹介している刊本もある。内容は、意、気、神について、また発勁の方法にも言及している。	『打手要言』の第３段落目、第４段落目から成る文。精神のあり方、意や神についても言及している。	『打手要言』の第５段落目。『十三勢説略』または『十三式説略』と表記されるケースもある。意や気についての解説、脚や腰の保ち方などについて言及している。

※本表について …各種参考資料をもとに代表的な事例を古典研究会で挙げたもの。